

9 心の支え

語り手：鈴木 幸子 / 聞き書き：資料収集調査員 湯山 英子

鈴木（旧姓・高橋）幸子の略歴

- 昭和 11（1936）年 10 月 北海道広尾郡広尾町野塚に 5 人兄弟の長女として生まれる
- 昭和 16（1941）年 父、東安省鶏寧県哈達河開拓団【用昭集→満蒙開拓団】の農業指導者として
単身渡満
- 昭和 17（1942）年 実母、兄 2 人、妹 2 人と共に哈達河開拓団に移住
- 昭和 20（1945）年 集団自決（麻山）で実母を亡くす。すぐ下の妹とともに生き延び
中国人養父に拾われて、青竜村で 4 年近く生活する
- 昭和 24（1949）年 父が迎えに来て牡丹江へ。紡績工場で働く
- 昭和 28（1953）年 父と継母（終戦後中国で再婚）、妹と共に帰国
- 昭和 35（1960）年 小学校の担任、畑スミ先生と北海道で再会
- 昭和 42（1967）年 結婚
- 昭和 57（1982）年 中国墓参【用昭集→】団に初めて参加。その後も父の代理として昭和 58
年、59 年と続けて 3 回参加
- 現在 北海道河東郡音更町に在住

はじめに

「岩崎（旧姓・畑）スミ先生からの便りは、心の支えです」。鈴木（旧姓・高橋）幸子が満洲

に渡ってから入学した小学校の担任だったのが畑スミ先生。スミ先生とは終戦の年に別れて、再会したのは15年後の北海道だった。大雪の中、先生の夫が由仁駅（夕張郡由仁町）まで馬ソリで迎えに来てくれ、岩崎家でお互いの生存を喜び合った。その後も行き来は続いている。2人は、集団自決で生き残った子供たちの消息を知らせ合いながら、彼らの帰国に尽力した。そして、スミ先生から励ましの言葉とともに「ゆきちゃん、私たちは生きて伝えていかなければならない」と、いつも諭されている。

1. 渡満まで

故郷は十勝

父の秀雄は、北海道の十勝地方にある広尾町の酪農家。母方の祖父は福島の喜多方出身で、祖父は広尾の豊似の代用教員として北海道に渡った。祖母は、父が子供の頃に亡くなっている。幸子の父の仕事は、農業のほかに、真面目な性格を買われて農協の役職を頼まれるなど、家業以外で何かと出歩くことが多かった。幸子は、上に兄が2人おり、長女として生まれる。3歳下の妹政子、5歳下の和子がいる。満洲へ渡るときは、父、母の貞子、兄2人、妹2人、そして幸子の7人。同居していた祖父は、馬が好きで「ここで、馬の世話をしたい」と言って広尾に残ることになった。

きっかけ

父が所用で札幌に出かけたとき、同じ汽車に乗り合わせた広尾町の助役が、「満洲に行ってみないか」と誘った。昭和16（1941）年3月、満拓の農業指導員として家族を広尾に残して一足先に東安省鶏寧県東海に向かう。翌年の春には母の貞子と5人の子

供を迎えに来た。

家では牛を何頭か飼っていました。父は馬鹿真面目で、農協の仕事も引き受けていましたから、自分のやりたい酪農が出来ないことで嫌気がさしていたかは分かりませんが、広い満洲であれして（試して）みようかと思って行ったみたいですよ。ちょうど、役所の人から頼まれたのをこれ幸いにしてね。

父親が満洲へ渡るきっかけは聞いたことがあったが、何が本当の理由だったのか今となっては憶測でしかない。幸子が49歳のときに父が亡くなっている。

記念写真



父の満洲を記念して撮影

写真の裏に「昭16、3、27. 高橋氏満州出発ノツカ」と書かれている。ノツカは広尾町の野塚のことである。母方のおばさんの膝の上にいるのが政子、そして幸子、母に抱かれているのが和子、父と兄2人。旭川にいたおじさんに送ったこの写真を再び見ることになったのは、終戦のずっと後のことである。

広尾から汽車に乗り、京都の宿に泊まって、下関^{しものせき}あたりから発って行ったと思うんですけど。船が最初に着いたのは釜山ですか。港の明かりが、この田舎から行ってすごくきれいだったのが、子供心に印象に残っています。

こうして日本を後にし、家族7人は京都、釜山^{ぶさん}を経由して満洲に向かった。釜山を経由したことは、後から父に聞いて分かった。

2 . 満州での生活

小学1年生

鶏寧県の東海駅の近くに農産物交易所事務所があり、高橋家はそこに住むことになった。東海駅は、林口^{りんこう}と東安市^{とうあん}を結ぶ虎林線^{こりん}の駅である。駅前の風景は今も記憶に残っている。しかしその後、間もなくして哈達河開拓団の団本部近くに移ることになった。父の仕事は、作物の成長具合を見たり、団本部の給料を鶏寧市まで取りに行くなど、団関係の仕事が多かった。父がいつもリュックサックを背負っていたのは、この給料を運んでいたからだと言っていた。

翌年の春、幸子は哈達河在満国民学校^{ハダカマツ}に入学。大部分の児童は、寄宿舎で生活していたが、家が近かったので学校まで歩いて通った。学校と家との間にまっすぐな道があり、その両側に並木があった。現在住む十勝の音更町の風景に、その様子を重ねるときがある。

あのころは、何もなかったですからね。畑先生が東安に出張したりするときは、星や月、チ

ヨウチヨを模ったビンドメなどのお土産をいただくのが楽しみでした。あの先生、きりっとしている反面、すごく生徒をね（思いやって）。私たち女の子、何人くらいいたでしょうね。お土産、買っていただいて、それがすごく楽しみでした。あのころは、何もないときでした。

畑先生は、まだお若いですし、本当にキビキビとした、今はちょっとね。背中も丸くなって。そのときは、ぴしっとした先生でした。お遊戯とか教えていただいて、「めんこいこうま」「めんた（？）こんまのたてがみを」など覚えていますよ。

畑スミ先生は、小学3年生のときの担任だった。当時のスミ先生は、^{いわみざわ}岩見沢の学校を卒業したばかりで父のいる哈達河開拓団に移り住み、そして国民学校の職を得た。児童たちと年齢的に近く親しみを覚えたが、反面、厳しさがあつた。幸子は、スミ先生の厳しさと優しさとの両面を感じ取っていた。

冬の思い出は、教室の二重窓の内側に綿を雪のように飾ったこと。綿のフアフアとした感じを雪に見立て、雪だるまに似せて飾ったのはスミ先生だった。また、お遊戯を習った記憶が鮮明に残っている。スミ先生のきりりとした様子は、紀元節などの行事での羽織姿が印象的だった。壇上で背筋を伸ばし、お盆を持っている姿を今も覚えている。

そのほかの小学校時代の記憶は、遠足のお弁当の時間。近くの山に出かけ、団本部が見えるところの診療所を通り、橋を渡って、小高いところに神社があり、その鳥居をくぐり、山まで歩く。野原でお弁当を広げ、そのときの白いご飯を覚えている。しかし、その白いご飯も終戦間際になると、カボチャや大豆を混ぜたご飯に代わる。母親が作った手提げ袋に入れ、そのお弁当を持っていつも出かけていた。

また、家の近くに中国人部落があり、そこに住む中国人が運動会には「ヤンクウニヤン」という、黄色いホオズキを売りに来ていた。日々の生活では言葉の問題もあり、ほとんど言葉を交わすことなく、小学校生活を過ごしていた。

体育館で、上級生の先輩があやこ（お手玉）を、こうやって5つも6つもあやことりをして、私たちも教えてもらって。風船みたいに丸くね。3年生の頃は、千人針、慰問袋、お手紙とか、兵隊さんお元気で頑張ってくださいと。

幸子の小学校の記憶は、小学3年生までで切れている。3年生の夏、「林口まで行けばまた学校で勉強できる」と言われ、ランドセルと手提げ袋の2つを持って開拓団を後にした。

3．敗戦と集団自決

やだ、死にたくない

8月10日、ソ連軍の攻撃を恐れて団員全部が鶏寧に避難することになり、村を出発した。幸子はランドセルと母が作ってくれた手提げ袋を持っていた。母38歳、兄の秀ひで嗣14歳、秀昭ひであき12歳、妹の政子7歳、和子5歳、久子ひさこ1歳、そして幸子は10歳だった。父は、その日、出張で鶏寧に一足先に行っていた。しかし、鶏寧から再び哈達河へ向かう途中で、家族とすれ違った。そのとき、靴の中に隠し持っていた砂糖を母に渡している。父とは一緒に行動することはできず、そこで別れてしまった。

幸子は集団自決がどういった経緯で決行されたかは知らない。その現場で息を潜め

るように、恐ろしさの中でただじっとしていた。

3日近くいて、みんな死んだふりじゃないですけどね。恐ろしくて。私たちも日本人の男の人を見たらバーンって撃たれるからね。自決した後でも「誰か苦しんでいる人いませんか」って。死んだふりして、あれだったんですけど。1人小さい男の子だったんですが、たまたま「誰か苦しんでいる人いませんか」って言って、女の人が「まだあれです。お願いします」って始末してもらって。バーンって始末してもらって、その男の子が「お父さん、ぼく嫌だ。一緒に行きたい」ってね。「駄目だ、そんな」バーンってそこで始末した。

母も拝むような形で、久子、和子が。向こうに行ってから弟が生れて病気で亡くなって、その後生れたのが久子、1歳にもなっていないで。それを抱いて拝むような形で死んでいました。兄は後ろにいて、妹とその和子が「おかあさん」って。肩に手をかけて後ろの方でここを（顎）を撃たれて割れていました。顎に弾にあたっていて（顎にあたったのは後から見ただすよ）、60年も経ちますが今も記憶にまだ、骨にあたるカザッっていう音、まだ記憶にしっかりと。いやあ、あたったその音がね。

撃った弾が骨に当たり、その音が今も耳に残っている。幸子は、日本人の男の人に見つかったら「殺される」と恐ろしくなり、ただただその場で息を潜めていた。

「死にたくない」というような。「やだ、死にたくない」、簡単に言えば「弾が当たったら、痛いだろうな」とかね。そんな感じですよ。

このときの心情をこう語る。集団自決で、母、2人の兄、2人の妹、和子と久子が亡くなった。兄弟姉妹で生きていたのは、唯一、妹の政子だけ。「ああ、生きていたんだ」と、政子の生存を知って安堵した。母が父からもらっていた砂糖を一緒になめて、じっとその場にいた。近くで兄と同じくらいの男の子が生存しているのを確認している。どこか撃たれていたようだが、頭はしっかりしていたようだ。3日間ほどお互いの息を感じながらその場を動けなかった。

馬車に乗せられて

集団自決から3日後、中国人の張学政ちょうがくせい（のちの養父）が、馬車に乗って様子を見



養父の張学政

に来ていた。馬車は開拓団のものであり、着物や毛布など目ぼしい品を物色していた。そして、幸子らを見て「行こう」と手招きした。「ああ、助けてくれるんだ」と思った。馬車に乗ったとき、生存を確認した男の子は、すでに生存している心配がなくなっていた。最後の言葉は、「兵隊さん、水ください」という虫の息のような細かい声だった。馬車に乗ったとき、もう1人、体格のいいおばあちゃんが生きていたが、中国人に「駄目だ」と馬車に乗るのを拒絶させられた。「あのとき手を差し出せば」と、今も悔いが残る。「餓死したのかと思うと、胸が痛いです」。

2人は、張学政の住む青竜の村に連れて行かれた。張は鉄道工夫をしながら農業を営んでいた。幸子は2頭の馬の世話、妹の政子は豚の世話が主な仕事で、そのほかにもトウモロコシを臼で挽いたり、草取り、ご飯支度などいろいろな仕事をこなした。

仕事をしなければここでは生きていけないと思い、ひたすら働いた。妹の政子は、一時、近所の家にもらわれて行ったことがあったが、あまりにも泣くので再び張の家に戻された。政子が泣けば泣くほど、幸子は「私だって悲しい、不安です。でも泣けませんでした」と、一緒に暮らせることがずっと続くように願い、そして働いた。

妹は7歳でしたでしょう。グシュグシュって（泣いて）何日もね。明るくなれば、はじめのうちには泣いてばかりでね。そのうちに泣いていられません。豚の用事を言いつけられて、面倒をみなければならない。

盆正月は（豚を）一頭殺して。行った年の12月なんて、夜中に餃子を作った。自分の分を作るんですから。眠いのに。年越しするのに餃子作って。何事もびっくりするようなことばかり。水餃子食べて、福っていう字を書いて切り抜いて玄関に貼ったり、豚の頭をきれいに削って。皮を茹でて食べられるように。玄関に神様を迎えて。コウリヤンやトウキビを臼であれして、ボミサーズってゴロゴロしたもの。塩で炒った野菜、冬はハクサイを切ってさっと茹でて、春雨、豚肉、おかず作って、ハクサイのすっぱいのが春雨と合って美味しかったですよ。お茶碗も大きくて、お箸も太くて、手でつかんで。私たちが食べていたものとは全然、違うでしょう。

盆正月は（豚を）一頭殺して。行った年の12月なんて、夜中に餃子を作った。自分の分を作るんですから。眠いのに。年越しするのに餃子作って。何事もびっくりするようなことばかり。水餃子食べて、福っていう字を書いて切り抜いて玄関に貼ったり、豚の頭をきれいに削って。皮を茹でて食べられるように。玄関に神様を迎えて。コウリヤンやトウキビを臼であれして、ボミサーズってゴロゴロしたもの。塩で炒った野菜、冬はハクサイを切ってさっと

茹でて、春雨、豚肉、おかず作って、ハクサイのすっぱいのが春雨と合って美味しかったですよ。お茶碗も大きくて、お箸も太くて、手でつかんで。私たちが食べていたものとは全然、違うでしょう。

それも、今は懐かしい。同居する小学4年生の孫にこのお正月の様子や食べ物のことをよく話して聞かせている。また、妹の政子と一緒にだったことが大きな心の支えとなり、「ほかの残留孤児から比べると幸いだった」と今も思っている。また、幸子のいた村では、日本人だからといういじめはなかった。しかし、自分から、日本人だと口にするにはけっしてなかった。身を守る術のように感じていたのである。また、ある日、村に住む中国人の子どもが、見覚えのある手提げ袋を持っていた。母が自分の着物の帯をほどいて作ってくれた手提げ袋だった。「あっ」と声を出しそうになったが、止めた。家を出るときにランドセルと一緒に持っていたものだった。母の形見だっただけに、今もそのときの様子を鮮明に覚えている。

さらに、終戦間際にソ連兵が馬に乗ってきたことがあった。中国人の家に入って来て、金目の物を持って行くので、張の家では缶の中にそれらを入れて土をかぶせて隠した。村の人をはじめ張の家も裕福な家ではない。日本軍の毛布など拾って来たものを隠した。さらに、「日本人の子」が見つからないように、豆のツルの支えの下に穴を掘って2人を隠してくれた。

父の迎え

自決前に会った父は、団本部の仕事の途中で逃避行の身となり、ハルピン、そして牡丹江にたどり着いていた。終戦間際には、家族が死んだ自決現場へ駆けつけること

はできず、しかも体を壊していた。牡丹江では、中国人の経営する養鶏場に身を寄せて、生みたての卵を失敬しながら体を回復させた。また、牡丹江の市街で日本人が経営するうどん屋に住み込みで働き生き延びていた。いつハルピンにたどり着いたかは知らない。牡丹江とハルピンが前後しているかもしれない。そのハルピンで、幸子と政子を青竜の村で見たという子ども連れの女性に会った。その女性によれば、終戦の9月、逃避行中に青竜の村で2人に会ったという。幸子はある日、村長の家と呼ばれ、その女性に会って父の名前と出身地を告げた。偶然にもその女性がハルピンで幸子の父に会い、生存を知らせることができた。

父と別れて3年の月日が流れていた。最初、父が迎えに来たときは、養父母に「渡さない」と言われ、妹の政子は、日本人の男性である父をひどく怖がった。

言葉も度忘れしているし、でも父の言っていることはかすかにわかるんですよ。でも日本語は出てこないんです。妹とは、ソ連の兵隊さんが来たりするから日本語で話してはいけない（と言われ）。向こうの人が、最初に教えてくれたのが「ウオーシーチュウグエンハイザー（我は中国人の子供）」「私は中国人の子どもです」って。（何か）聞かれたら、クイラン（桂蘭）、妹はクイゼン（桂珍）ですと名前をもらって。（妹は）自分の父でも、大人は、日本の人は、バーンと撃たれるという恐ろしい記憶が残っているんでしょう。父が自決現場にお参りに行こうって言っても妹は「いやだ」って言うんですよ。7歳の妹は自決現場まで行こうといっでも爪を立てて「行かない」って、のちに父が言っていましたよ。

1度、青竜に日本の鉄道技術員が来たことがあった。2人とも、日本人の大人が恐くて会うことができなかった。日本人の大人は人を殺すと、自決現場の惨事が植えつ

けたのだろう。それだけに妹政子の父親に対する恐怖は、迎えに来て拒絶となって表れた。同時に、養父母も渡すのを拒んだ。父親は、一旦は諦めて牡丹江へ帰ることになった。

2度目に父親が迎えに来たとき、周囲の中国人が養父の張に「子どもも出来たことだし、返してあげなさい」って説得してくれた。養父母に念願の子が生まれたばかりだったのである。養母も「返してあげなさい」と諭し、養父は返すことを承知してくれた。

父は1度、断られて牡丹江に戻ったんですが、2度目に来たとき、(養父母のところに)女の子が出来ていて私も子守りしていたんですけど。養母も返してあげなさいってことになって。駅に見送りに来てくれたときは養母も泣いていました。やっぱり3年くらいもいると情が移るといふかね。

親子3人は、青竜の張の家から歩いて自決現場にお参りに行った。現場への道は、幸子が覚えていた。その後で、青竜駅まで養父母の見送りを受け、父親と共に牡丹江に向かったのは、昭和24年5月のことである。

生き残った5人の子どもたち

妹の政子は日本語を忘れていた。記憶力のいい幸子もかなり忘れてはいたが、自分の名前、父の名前を覚えていたことが父との再開を果たすことに繋がった。もう一つ、青竜に幸子と政子以外にも日本人の子ども5人がおり、その子らの名前を幸子が記憶していた。彼らもまた集団自決時から生き延びていた。この名前を覚えていたことが、

のちの身元調査に役立つことになる。^{さ さ きりょういち}佐々木良一、^{わたなべみつあき}渡辺満昭、^{たきざわれいこ}滝澤麗子、^{ぼ ぼ しゅう こ}馬場周子、
^{かわまたれいこ}川又礼子の5人である。彼らとは、青竜の村でよく顔をあわせていた。

青竜の村では、みんな1年生ばかりだったからこの人達は、馬場周子さんとか、村では話もしたり、村ではだいたいどこらへんにいたかはみんな知っていました。滝澤麗子さんと渡辺さんのもらわれた家は近かったんです。何せ、村では1ヵ所しか水道のポンプがあるところはなく、冬には水は出ませんが、雪とか氷とか溶かしてブタ、ウマに飲ませて。ポンプは1ヵ所か2ヵ所しかなくて、この人の家の近くに行って水を汲みに行ったものなんです。別々の家にもらわれていって、どこに誰が住んでいるかは全部分る。本当に30か40しかいないような村でしたから。昔の田舎はオオカミが入らないように土塀でずっと囲って、人の丈より高い、そこに村があって、本家、分家、お金がある人とか、ひとかたまりになってね。みんな土塀のふちにね。みんなの名前を知っていて、父に会ったときに、みんな父にね話して、メモしてて、道庁に報告したんですよ。

のちに残留孤児を探すときに、この幸子の記憶が手がかりになる。しかし、彼らと最初に再会できたのはスミ先生で、終戦から35年後の訪中団のときだった。

紡績工場で働く



幸子 14 歳と妹の政子 12 歳

親子3人は牡丹江に着いた。日本へ帰るのはそれから3年の月日を要した。牡丹江に着いたものの父は一時期、単身で働きに出て、姉妹は日本人医師宅に預けられたことがあった。その後、幸子は、紡績工場の職を得ることになる。当時はまだ日本人の技術者が紡績工場に残っており、日本人女性も数名、そこで働いていた。幸子は誘われてその紡績工場で働き始め、親子3人はこの紡績工場官舎で住むことになった。仕事は、糸から布にする工程を担当し、三交代のため夜中の仕事もあった。父は電気工事などをしながら、家のご飯支度もしていた。妹の政子は、工場内の寺子屋のようなところで勉強を始めた。工場は千人ほどが働いており、日本人は数名で、中国人からの差別は無かったという。また、床屋や風呂のサービス券が支給され、ただで利用できた。その工場では、労働者の働きぶりを評価し、選ばれた人が保養地に1週間ほど滞在できるというご褒美が出ていた。幸子は、糸つぎで真面目に仕事したことが認められ、保養地で1週間ほど過ごすことができた。

このころ、ソ連の映画をよく見た。また、周囲には白系ロシア人と仲のいい日本人が多くいた。お世話になった日本人の女医さんもそうで、彼女に誘われて一緒に白系ロシア人のクリスマスに呼ばれたりした。また、あるとき、白系ロシア人のおじいさんから「おいで、おいで」と手招きされ、行ってみるとパンを焼いてくれてそれをもらった記憶がある。お菓子も何もない時代だっただけに、嬉しかったのをしっかり覚えていた。牡丹江にも白系ロシア人の技術者が多く住むようになり、専用のアパートもあった。そのころには、ロシア人を見ても怖いと思わないようになっていた。



幸子 18 歳のとき、中国で紡績工場の同僚たちと

引揚船に乗る

6 歳だった少女は、中国に渡って 16 歳になっていた。この間、「地図のないような人生をそれこそ生きてきた」と美空ひばりの「川の流れるように」の歌に重ねる。3 年 8 ヶ月の中国人家庭での生活、その後の紡績工場での生活、どれも生きるために必死に働いた。親子 3 人が揃って引揚船に乗るのは、昭和 28 年の興安丸である。父は、前の年に牡丹江で再婚しており、家族 4 人が北海道の広尾にたどり着いた。広尾では、からふと権太からの引揚者住宅に住んだ。戻ってからの父親は体を壊し、数ヶ月間は働けない状態が続いた。学校へ行くどころではなく、継母と幸子はすぐ働き始めた。政子は、小学校 1 年までしか通っていなかったが、中学校に入れられた。

私は日本の教育は小学 3 年生で終わりですから。日本に帰ってから、セーラー服、学生の姿を見て羨ましかったです。

小学校 3 年で教育を終えたことを、今も小学校を満足に行けなかったことに引け目を感じている。勉強が好きだっただけに、尚更である。

4．墓参団に参加して

スミ先生と再会

父親が働けない状態だったため、幸子は広尾のイカ加工場に通っていた。のちに町内のまるや呉服店でお手伝いとして働き始めた。奈良から風呂敷包み一つで北海道に渡り広尾で店を開くというしっかり者のおばあちゃんと一緒にリヤカーを引いて畑に行ったり、店のまかないをした。

そうして月日が経ち、スミ先生と再会するのはずっと後のことである。昭和35年ころ、旭川あさひかわに住む祖母に会いに行った帰り、ようやくスミ先生（結婚して岩崎スミ）の住む由仁町に立ち寄ることになった。先生のことをどう知ったかは分からない。春先だというのに雪の多い日で、駅で乗馬ズボンをはいたスミ先生の夫の出迎えを記憶している。

岩崎先生は、「ゆきちゃんが私の家に来たときに、第一声が『先生、みんな死にたくないって言って死んだんですよ』って」。私は記憶にございませんで、ほかの間（場面）では言ったかもしれないませんが、第一声だって。先生に言わしたら「挨拶もそこそこに」だと。私は死にたくないって思いだったから、「私は死にたくない思いだった」よって言ったかもしれないけど。

この部分はお互いの記憶が食い違う。しかし、スミ先生にとっては「死にたくない」という思いが、今でも強く印象に残っているという。「死にたくない」気持ちは、幸子が生き延びてきた原動力でもある。こうして、スミ先生との再会を果たし、生き残った5人の子どもたちの消息を知らせることができた。その後も連絡が途絶えたことは

ない。昭和 42 年、幸子は広尾で結婚し、夫の実家のある白老^{しらおい}（白老郡白老町^{しらおいちょう}）まで行った帰りにはスミ先生の家に寄るようになった。スミ先生は、よくおにぎりを作ってもたせてくれた。しかし、その夫は、昭和 49（1974）年に 2 人の子どもを残して 34 歳で亡くなり、幸子は再び夢中で働かなければならない日々が続く。そのころ、父は町内で雑貨店を経営するようになっており、その手伝いを始めた。

中国への墓参^{【用語集】}は、昭和 57（1982）年が最初で父の代理だった。その後 58 年、59 年と 3 年続けて参加している。スミ先生と一緒に行ったのは平成 5（1993）年とその後 2 回、そして平成 16（2004）年である。

スミ先生は昭和 55（1980）年の訪中団に参加して、青竜に残されている教え子の馬場周子、滝澤麗子、渡辺満昭と再会した。2 年後の 1982 年に幸子も、馬場、滝澤、そして養父の張学政と会っている。5 人のうち、佐々木良一、川又礼子はすでに亡くなっており、川又の遺児と対面した。また、昭和 58（1983）年 1 月には、馬場周子と滝澤麗子の一時帰国^{【用語集】}が実現し、スミ先生とともに幸子の住む広尾に来てくれた。しかし、馬場周子はこの 5 年後に中国で亡くなってしまった。

何も語らない妹

昭和 59（1984）年、妹の政子が 2 人の子どもを残して病死した。辛苦を共にした政子は、満洲、養父母の家、牡丹江の生活については、生涯一切語らなかった。

妹は、芯はしっかりしていました。終戦の頃の思い出話は一切しなかったんです。私たちそういう話をしても、「あんた分かっているかい？」とか（聞いても）、こうだったとか、同級生どうだったとか、ハタホでどうだったとか（話さない）。親兄弟の思い出はじめ、そういう

話をしてもだまって聞いてはいるけど、一切そういう話をしなかったですよ。父が自決現場に行こうと言っても爪立てて行くって言わなかった、って話をしても一切人事のようにだまって聞いていたけど。「あんた覚えている？」って聞いても。あまりの恐ろしさに、あまりにも言いたくないのか、記憶がないのか、妹は一切そういう話しをしなかった。聞いた記憶がない。問いかけても、忘れたのか、あまりの怖さに抜けているんじゃないかと。

スミ先生が来ても妹の政子は一切語らなかった。忘れていいのか抜けているのか、何もしゃべらない。中国でも終戦の学校の思い出も一切、中国の全部を話さない。幸子自身もそうした様子を見て問いただすことはしなかった。そんな政子を、あまりにもショックで、記憶が欠落してしまったのではないかと今では思っている。



平成5（1993）年、青竜駅で。妹が一時期お世話になった家族に再会。

継母を看取るまで

麻山の集団自決で亡くなった母は、短い間だったが幸せな生活を過ごしたと幸子は思っている。父は昭和63（1988）年に亡くなっているが、継母は93歳になり、町営の老人ホームに暮らす。もともと青森の出身で、満洲では洋裁をして身を立てていた。

幸子は、今、娘のいる帯広に住んでいるが、広尾の家をそのままにして、ときどき広尾に戻って継母を見舞う。継母もまた、家族を満洲で亡くし、再婚相手の幸子の父とともに、誰も知る人のいない北海道で暮らしてきた。継母を看取るまでは、広尾の家を引き払うことは出来ないという。最近、妹の23回忌、夫の33回忌の法要を済ませた。「あんたはね、今そうやって仏さんを守っていきなさい。生かされているんだよ」とスミ先生は、幸子を諭すように言う。



聞き書きを終えて

鈴木幸子さんは、「残留孤児」といっても養父母に預けられたのは3年8ヵ月間だった。父親が迎えに来てくれて、しばらく中国で働いた後に引揚げ船に乗ることが出来たのである。幸子さんに会う前、小学校時代の先生だった岩崎スミさんを紹介されていた。スミ先生は引揚者である。最初、両者がこの本の対象者に該当するとは思わなかった。中国帰国者支援・交流センター【用語集→】の担当者から「先生とその教え子、残留孤児との関係という視点で書けますか？」という問いに、「多分、大丈夫かと」と曖昧な返事をしてしまったからの聞き書きとなった。インタビューは計3回（2006年11月17日、2007年2月7日、2007年10月30日）、3回目は原稿チェックと補足説明に充てた。そのほかに電話やハガキによるやり取りが今も続いている。

実は、鈴木幸子さんも岩崎スミさんも、いくつかのドキュメンタリー番組や本で取り上げられている。麻山事件という集団自決での数少ない生き残りとして、多少知られている存在だった。集団自決については、すでに何人かの人が書いている。本稿では、当然このことについては触れている

が、この悲惨な集団自決を通し、「生き残り」としてお互いの関係性が深まっていったことに重点を置いた。

次にその関係性がどう築かれていったのかにも焦点を当てた。鈴木幸子さんの生き方、岩崎スミ先生の生き方の途中で、微妙に交差して絡み合ってくるのがいくつかある。それは、残された孤児たちの消息と、終戦後何年も経ってからの墓参までの遠い道のりだった。お互いがこの事件でほとんどの家族を亡くしている。自ら「残された者」と称するように、残された者の使命を考えながら日々生きてきたのである。こうした意味では、聞き書き・編集段階で聞き手側の意図が反映されていることをお断りしておきたい。

聞き取りを終えてから、広尾町に住む幸子さんの継母が亡くなった。一緒に引揚船に乗って北海道にたどり着き、戦後の苦労を共にして生きてきた人である。幸子さんは、兼ねてから最期を看取りたいという気持ちでいた。看取ったことで、責任を果たしたという気持ちがある一方、満洲そして日本に帰ってからも辛苦を共にしてきた最後の一人が逝ってしまった悲しさも大きかったようだ。継母が亡くなってこの1年間、気持ちが塞ぐ日が多かったと言う。

最近の幸子さんは、地元の中学の教師が生徒を連れて満洲時代の話を聞かせてほしいという要望に応え、体験を語ることもあるようだ。岩崎スミ先生の「伝えていかなければならない」という教えをしっかりと守っているのだろう。(2008年12月末) **(ゆやま えいこ)**

基本データ

聞き取り日：平成18(2006)年11月17日、平成19(2007)年2月6～7日

聞き取り場所：鈴木幸子宅

初稿執筆日：平成19(2007)年12月

＊注 「麻山事件」

中国黒龍江省牡丹江近くの麻山で、哈達河開拓団の4百数余名が集団自決した事件。昭和20（1945）年8月9日、ソ連軍が満洲に侵攻し、哈達河開拓団の団員とその家族は逃避行を始め、その末8月12日ころに集団自決を行った。

<参考資料>

合田一道「証言 満州開拓団死の逃避行」富士書苑、1978年

中村雪子「麻山事件」草思社、1983年

蓑口一哲「開拓団の満州」新生出版、2005年